



the Salamander in  
the Circle

第三十七章 翳る金星

峯村 明

Salamander in the circle

### 第三十七章の登場人物

ダーヴェ	……	ネウトラ評議会・学術調査団の団長 上級賢者
ヒューダー	……	学術調査団の団員 民族・言語学者
ヤスウ	……	学術調査団の団員
イリチャ	……	火精霊。ヒューダーが名付けた
マミヤ	……	ホシナ族の娘
バイスロイ	……	黄金門の皇帝の息子
コモラ	……	前総督バンテオラの顧問 最高賢者
バルダリス	……	元・メッサナの総督代理
シバド	……	ベレオーサ総督
ドウル	……	シバドの兄 ベレオーサ家当主
レガリオ	……	アンベレオ王国の国王
レル・ヴァリス	……	エウメロスの王室付近衛隊長

### これまでの主な登場人物

ネウトラ評議会	ハイヤーン	本部科学者のリーダー	世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長 マミヤの父
	ティコ	科学者		オマキ	ホシナの妻
	ナシル	本部・事務職員		キト・コマ	ホシナ族の男たち
エウメロス王国	ヘルガ	王女		ゴン	ホシナ族の男 (ヤサカオ族出身)
	カール	王子 ヘルガの昔		サノヒコ	王に仕える役人
	ヴァリス将軍	レルの父		フツヌシ	王に仕える者 将軍
	ロウナス	國務省の高官		ヤサカオ	ヤサカオ族の族長
	アンテロ	レルの副官		チドリ	アマセオの妻
	摂政	亡国王の弟		ハマツ	チドリの養父
ケストル王国	パウル	国王		タマシギ	ハマツの妻子
	ウルリク	第三王子		オモイカネ	世界の果ての島の王に仕える者
	ヘンリク	ウルリクの息子		コタエ	"
	ホベオク	ケストル人の美女		スクナ	"
	ソルド	闘技場の警備隊長	アマノカガセオ	シトリ族を去った兄弟	
黄金門市	皇帝	皇帝	メッサナ市	バンテオラ	メッサナ市の総督
	バソネル	バイスロイの参謀		メルノ	音楽家
アンベレオ	ソラン	祭祀長		メンドルブ	メッサナ化学者団代表
				バラム&バランケ	双子のジャガー バンテオラの部下
				冥界	冥界王
			ベネトナシュ		死神
			テクトリ		最下層ミクトランの主
				プラトニオ	メッサナを追放された化学者

## 目次

### 翳る金星

538.

539.

540.

541.

542.

543.

544.

545.

546.

547.

548.

549.

第三十七章のあとがき

これまでのあらすじ

奥付

## 翳る金星

538.

パルダリスはそろそろと面をあげ、コモラはきょとんとした。そして彼らは互いを見、同時に口を開いた。

「〇〇、〇〇〇〇！！」

「△△△△△！ △△△！！」

「おお、これは失礼、あんまり驚いたもので」

「いやいや、こちらこそ、びっくり仰天してしまいました」

パルダリス邸に寄宿していた外国人たち、バイスロイ、ダーヴェとヒューダー、マミヤがいなくなり、そしてついにはヤスウまでもが黙って姿を消し、呆然と過ごしていたところへ、一通の書状が届いた。総督府からである。

あまりに嫌な予感にパルダリスとコモラはしばらく書状を遠巻きにしていたが、そんなことをしていても埒が明かないので、厭々封を切った。

まず、パルダリスが目を走らせて、凍りつき、卓上で書状をくるりと回してコモラに向けた。そして彼らは互いを見、同時に口を開いたのだった。

「——信じられん——」

「——まったく——」

「どういふことでしょうか」

「そういうことだろう」

それは、ベレオーサ市において裁かれた犯罪者の罪が軽減、もしくは消滅されるというものだった。つまり、恩赦が行われるという知らせだった。

その根拠は総督家の慶事による、という。

\*

市内は一気に、さらに活気づいた。アンベレオ国王の総督府訪問という一大慶事に新総督ベレオーサ・シパドの結婚披露が重なるというのだから。活気づくというより、狂乱状態だった。こんなめでたいことが重なるわけがないくらいのめでたさだったから。

「あの新総督が結婚——」

パルダリスもコモラも絶句する。ことに、コモラには心当たりがないでもなかった。それはまさか——

王からの使者が総督府を訪れ、シパドの結婚相手を晩餐に招待したいと言ってきた。

「あたしは？」シパドはひじょうに不満げだ。「なぜあたしではなくて、結婚相手だけが招かれるのだ？」

たしかにおかしな招待であり、ごもっともな疑問である。

「さあな。国王陛下はきみとは幼なじみなのだろう？ 幼なじみがどんな相手を選んだのか、興味がおありなんだろ。それにきみは夜間もバルコニーで手を振らにやならんのではなかったか？」

シパドにとってはどうでもいい幼なじみに会うより、大勢の歓呼を浴びて手を振る方がよっぽど大事だったから、すぐに引き下がって着替えに行ってしまった。それまで悠々と腰かけていたバイスロイはやおら立ち上がり、ターバンで正装し、王の使者を促して出かけた。公式にレガリオに逢う機会をのがしてはならなかった。

市内は夜通し音楽が流れ、人で溢れている。満月を過ぎたばかりの夜空は明るく、降り注いでいるはずの流星雨はみることができないので、人々はもっぱら、街のあちこちで行われる音楽の演奏や演劇の鑑賞を楽しんでいる。バイスロイも目立たない成りで人々に混じって街中を歩いてみたが……ことに、音楽は耳を塞ぎたくなった。なにかが以前とちがう。知っているはずの演奏を聴いても、別のものを感じる。そう気づくと、楽音が苦痛なものになってくる。

(なぜだ……)

自分が変わってしまったからか。そうかもしれない、と彼は自嘲する。ほかに音楽が苦痛を感じる理由が思いつかないのだ。もし、音に関する科学的な専門家がいれば、あつことに気がついたかもしれない。

楽器を調律する基準音が、かつての基準音と微妙に違っているのだ。今ベレオーサ市で演奏されている音楽は、周波数という点で、かつてのメッサナの音楽とは似て非なる

ものと化していた。

540.

「やっぱり！ あなただったんだ！」

レガリオの夕食に同席していたのはイリチャだった。

「驚いたな。この前逢った時と顔つきがぜんぜん違う。まるで別人ではないか」

バイスロイは率直に感想を口にした。少年の顔色はまるでしおれかけていた花が水を吸い上げて生き返ったようなあんばいだった。しかし、その花のような顔（かんばせ）がみるみる曇り、険しくなった。そして手を伸ばし、バイスロイの腕をつかんだ。

「なぜ！？ ベレオーサ・シパドと！」

バイスロイは頬をゆるめて笑ってみせる。

「レガリオ陛下はよくご存知だが、シパドはなかなか気立ての良い、愛らしい性格の女性なのだよ。その上、総督閣下ときてる。私ほうまいこと、玉の輿に乗ったというわけさ」

はたしてレガリオは苦笑し、イリチャは目をつり上げた。だが声はささやきのように小さかった。

「バイスロイ！ あなたはダーヴェ先生とヒューダーを、マミヤを助けるために——」

「まあ、それはベレオーサが決めたことであって、私は関係ない。さっきも言ったが総



督を妻にするということはそのパートナーたる者も同等の権力を手にするということだ。それこそ望んでも手に入るもんじゃない。きみにはわからないかもしれないが、この手で権力をふるう、この手で。想像しただけで体中の血が逆流する。私は権力を握るために生まれた人間なのだ——」

バイスロイが息を継ごうと間をおいたすきに、イリチャは相手の腕を突き放すようにして体を放し、部屋を出て行ってしまった。

#### 541.

ふっと息を吐き、バイスロイは言う。「怒らせてしまったかな。しかし元気になってよかった」

レガリオは苦笑したままの顔で、食卓の椅子を友に引いてやった。「遠路よく来てくれた。さ、掛けて。食事をしながら話そう」

\*

「この間、そなたとイリチャさまを引きあわせたとき、そなたたちの話を全部きかせてもらった、と白状しておくよ」

「ああ、べつに、聞かれて困るような話はしてない」

「そうか……そなたはわたしの供としてベレオーサ市へ行くと言った。こういうことになるのではなかろうかという予感があった」

「レガリオ、貴方の迷惑になるようなことはしないつもりだ」

「わたしの迷惑。ふふむ。イリチャさまがなぜお怒りになったのか、そなたはわかっているのだから？」

「……思い当たる節がいくつもある。はて、どれだろう……」

「わたしはそなたの身が心配だ」

「シパドを味方につけてしまえば、これほど安全な立場はないぞ」

「そういうことではないよ」

レガリオは自分のと相手のグラスに飲み物を注ぎ、捧げ持った。「乾杯しよう。そなたの未来に」

## 542.

深夜の金星神殿はしんと静まり返っている。旧メッサナに住んでいたころは足しげくここへ通った。バイスロイにとってそこは『父』のいるところだ。今トゥランに向かいつつある肉体の父ではなく、魂の父だ。

学友や仲間たちはみな、彼の名を偽名だにとらえていたし、彼も周囲にいる人間の出身地や身上を気にしたことはなかった。そういうことは問題にすらならず、今この時、ここにいる。それだけが真実ですべてだった。心は熱く、幸福を感じた。まさに黄金時代だった。かつてのメッサナには分断というものはないのだ。

新総督の結婚相手に、彼らは石を投げるかもしれない。いや、それどころか、私だとわかれば、八つ裂きにするかもしれんな――

今の市民は薬物でハイになっているか、しょうことなしに顔だけ笑っているかのどちらかだ。なんにしても、打ち続いた混乱と恐怖とは市民に巨大な影を落としている。なにかの拍子に堰が切れれば、なにが起こるか想像もつかない恐ろしさが潜んでいるのだ

が、ベレオーサの者たちは、ことにシパドはそのことをなにも考えていない。

バイスロイはそっと頭を振る。市民の目の前で巨人にケストル人を襲わせ、マミヤにジャガーをけしかけ、そのジャガーを切り裂いた、シパドにそんなことをさせた発端はバイスロイ自身にあるのだ。我が身を守りたい一心でついたウソに。

市民たちが被った心的傷に比べれば、八つ裂きでも足りないくらいだ。むしろ……そう望もう。それだけのことをしでかしたのだから。

父よ。

偉大な金星神の血は誰にも渡さない。断じて。誰にも。

取引のためにここでもウソをついて人を欺いた。愚かな息子を哀れんでください。父よ——

543.

同じ晩。イリチャの部屋を外から訪問した者がいた。地上何百メートルという高さにある窓をその者は外から叩いたのだ。イリチャは不審には思ったがバイスロイと会ってからひどくむかついていたので、思った。（誰でもいいや。蹴飛ばして突き落としてやる）

内側から開いた窓から入り込もうとした“賊”は蹴飛ばされそうになってあわてて身をかかわした。（こらこらこら！！）

「その声！ レル！？」

「ひどいなあ。せっかく訪ねてきたのに。いきなり蹴るなんて」

「ごめん！ あやしいやつが来たと思ったんだ」

「おい、俺もいるんだぜ」

「ヤスウも！？ うわー、久しぶりー！」

「おめえ、なんか大人っぽくなってねえか」

「第二部で別れたきりだもんね、大人っぽくもなるよ。思えば遠くへ来たもんだ」

「あれ、おい、なに泣いてんだ？」

\*

「バイスロイのうわさは聞いたよ。街中その話で持ち切りだった」

「……なんだか…幻滅した。バイスロイさんでもっとりっぱな人だと思ってた……」

ヤスウとレルは顔を見かわした。

「僕はむしろ心配だよ。相手の懐に入ってしまうえば安全かもしれないけど、アンベレオという国は見た目通りの国じゃない。総督の夫だろうが国王の親友だろうが、排除される危険の方がよほど大きいと思う。それに、旧メッサナ市民の反感でのもあるんじゃない

いかな。彼はそれを百も承知のうえで……」

「いろんなものを天秤にかけたんでしょ？ でもって、極めつけはシパドさんを愛してるからでしょ？」イリチヤは目を光らせて挑戦的な口調で言った。

「彼、自分でそう言ったんだな、そうだろ」

「はっきりそう言った」

「は一ん……それでおめえはオトナに幻滅したってわけだ」

「バイスロイさんはヘルガさまとシパドを天秤にかけたんだ！　なんで！？　信じられない！　さいっっっついでだよ！　見損なったよ！！」

「ああ……それだけ……バイスロイ氏と王女の婚約、破談になった」

「……は？　どういう……あ、わかった、バイスロイさんはヘルガさまに愛想つかされてふられたんだ！」

「いや、王女殿下は婚約者であるバイスロイ氏を助けて連れ戻すと言って出発し、おひとりに戻ってこられた。バイスロイ氏の父君は婚約はなかったことにせよ、と。破談は父君の意向。その話は僕がバイスロイ氏本人に伝えた」

「父親がしゃしゃり出てきた？　じゃあ、バイスロイさんはヤケになってあのヘンな女総督と……！　だったら話はわかるよ！」

「落ち着いて。イリチヤ」

ヤスウはおもしろそうにふたりを見ている。

544.

「思うんだけど、彼が新総督との結婚を決めたのには大きな理由がありそうだ。もしかしたら、恩赦を取り付けるためかもしれない」

「恩赦？」

「いったん決まった刑罰を取り消す道があるのさ。だいたい大きな公的行事にあわせて行われる。新総督家の慶事なら立派に公的行事、それと引き換えにしようということじゃ……」

「ぼくもそれ、思ったんだよ、ヒューダーたちを助けるためにバイスロイさんは……。でも、そうじゃないって言うんだ。だからぼくはがっかりして泣いてんだ！」

「イリチャ。もしぼくが彼と同じ動機で同じように結婚を決めたとしても、たぶん、同じように動機を隠すよ」

「どうして？」

「相手の、この場合、ダーヴェ氏とヒューダーの、負担になるからさ。考えてもごらん、自分らの命を助けるために、彼は犠牲になったのだ、そんなことを抱えて生きていくのがどんなに辛いことか」

レルは、イリチャの顔がみるみるこわばっていくのをみた。

「なに、どうした？」

「ぼくが——泣きついたらんだ。バイスロイさんに。ぼくにはなんの力もない、どうしようもなく無力で、気が狂いそうで、助けて……って……」

「——」

「だけど、どうして彼に」

「記念硬貨を見た？ 世界中でばらまかれてる金貨」

「ああ、手にしただけで本物だとわかるずっしりしたあの重さ。彫刻がまた素晴らしい。素人の目にもあれは芸術品だね」

「あれに刻まれてる僕のプロフィールを描いたのは、バイスロイさんなんだ」

545.

長い廊下の向こうから誰かが走ってくる。なにか叫びながら。その声は石の壁に反響してよく聞き取れない。

「——ダァ！ ヒューダー！」

「あれ？ まさか、マミヤじゃないですか？」

ダーヴェのつぶやきを背に、ヒューダーは足を踏み出していた。

「マミヤ！？」「ヒューダー！！」

長い廊下の真ん中で、マミヤは体をぶつけるようにヒューダーに飛び込んできた。ヒューダーは受け止めきれずに、マミヤごと仰向けに倒れ込んだ。

「信じられない！ 信じられない！ 本当にヒューダーなの！？」

涙でぐしゃぐしゃの顔で、まみやは「信じられない！」と繰り返した。

「オレも信じられんのだが、どうしておまえがこんなところに？」

泣きじゃくってしがみついてくるマミヤの背をさすりながらヒューダーは尋ねる。彼はたった今総督府の地下牢から出てきたばかりなのだ。

「いちばん刑の重い死刑囚でも釈放されるって聞いたから。じゃあ、ヒューダーも、ダーヴェ先生も、いっしょに帰れるんだ、って、あたしもう大急ぎで。あ、あたしはこの上の階にいたのよ」

「上の階って、マミヤ、あなたも囚人だったってことですか？」



マミヤは服の裾で涙をぬぐいながらこっくりとうなずいた。「そうなの、先生。シパドっていう人にかからまれて、帰してもらえなくて。なんか、あたしも死刑にされるところだったみたい」

「おまえ、なにかやらかしたのか？」

「なんにもしてないってば。ほら、黒曜石の短刀、憶えてる？ ヒューダーがゴンから預かったっていうあれよ。あれのことでからまれたのよ。もうわけがわかんなかったわ」

かの短刀はヒューダーからイリチャへ、イリチャからヘルガ王女へ、そしてバイスロイへと持ち主を交代してきた。もともとはマミヤ救出のためのものだったから、それがかなった暁にはマミヤが所持すればいいくらいにヒューダーは考えていたが、マミヤは受け取らなかったのだった。結局、あれがもっとも力を発揮したのはバイスロイが持っていた時だったなとヒューダーは思いを巡らす。

「ダーヴェ先生、ヒューダー、ごめんなさい、あのね、バラムとバランケが、死んじゃった」「シパドがバランケの毛皮をお尻の下に敷いてたの。バラムはそれ知って逆上して、シパドに飛びかかって……ごめんなさい、ごめんなさい」

「なんとバラムとバランケが！？ いや、でも、マミヤ、あなたが謝ることじゃない」

「いいえ！ いいえ！」

「黒曜石の短刀でやられたんだな」

うなずくマミヤを呆然と眺めながらもダーヴェは言う。

「とにかく、ここを出ましよう、一刻も早く。話はそれから」

546.

その一報が届いたのは、シパドが優雅に朝食後のお茶をすすっているときだった。

連日、大小の公的イベントに出席し、その合間にバルコニーに立って一般市民に手をふっているのだから総督閣下にはそうとうお疲れのはずだが、彼女は今日も元気いっばいだ。

なにしろ、結婚という一大イベントがなんと向こうから転がりこんできた。執着して執着して執着して執着した相手。それがついというか、とうとう、手に入る。もう、有頂天の極み、笑いが止まらないはずなのに、無表情はいつもと変わらない。お付きの女官たちを以前にもましてぶきみな心地に落とし入れ、閣下は鋼の優雅さでもってお茶をすするのであった。

国王の招待を受けて昨夜ひとりで外出したバイスロイはまだ帰ってこない。きっとレガリオに引き留められて今頃いっしょに朝食でもとっているのだろう。気に入られずに早々に追い返されでもしていたら。それはそれで腹も立つだろうが、朝帰りくらい、どうということはない、あたしの許しを得なかったのはなんだが、まあそれくらい、許してあげよう。

と。「……シパド様……バイスロイ様が……」、と蚊の泣くような声。女官長がダイニングの扉の外から恐る恐る、顔をのぞかせている。そんなにあたしが怖いのか！ ふだんだったらそれだけで癩癩が爆発するところだが、今朝は虫の居所は悪くなかったので、あそんでやることにする。

「やっと帰って来たのか！ 遅い！ あたしは怒ってる！ そう言ってやれ！ しばらく顔も見たくないわ！！」

「いえ、あの、その、バイスロイ様のことで、市中警備隊が、すぐにでもシパド様にお

目にかかりたいと……」

「市中警備隊が？ バイスロイのやつ、酔っぱらって路上で寝てたとか？ それとも市民とケンカでもしたのか？」

「あ、あの、そういうことではないようでございます、大至急、ボムソワール邸跡へご同道いただきたいと申しておりますのです」

#### 547.

ボムソワール邸。メルノの実家。過日、旧メッサナ市民によって放火されて黒焦げになり、イベント真っ最中の現在はこの場所には誰も近寄れないようになっている。

この元大邸宅は大通りからかなり奥まったところにあって、周囲は美しい石造りの歩道や壁、小川が配され、背の高い棕櫚が葉を揺らして木陰をつくり、思索しながら歩くにはもってこいの場所だった。しかし放火事件の後には当然のごとく誰も寄り付かなくなり、流れていた水は枯れ、乾き、荒れ果てていた。

ベレオーサの市中警備隊の目を引いたのは、立入禁止になっている屋敷跡へ続く荒れた小径……といっても幅四～五メートルはある……の様子が前日の同時刻のものと違っていたからだ。乾いて不毛に荒れていた小径に、点々と、緑の草が生えていたのだ。何とはなしに不審に思った警備員が近づいてみると、草は小径の奥の方へと続いていて、警備員をその場所へといざなった。

前日までそこには何もなかった。というより、高温にさらされて黒く焦げた石畳しかなかったはずなのだ。小径の所々に生えていた草がそこで群生していた。その草むらの真ん中に――

警備員は思わず悲鳴をあげた。草むらのなかに人が倒れている。朝陽を浴びた緑色のなかに、真っ黒な髪を広げた、男だった。

548.

「鋭い刃物で幾度も刺されたようです」

警備員の言う通り、男の衣服はズタズタに切り裂かれていた。警備員はほかにもなにか言っているが呆然自失したシパドの耳には届いていない。

「不思議なのですが、さうとう出血されてるはずなのに、どこにもその跡が残っていないのです。衣服にも血痕がありません」

知らせを受けて駆けつけてきたドゥルがその話を聞いている。彼もまた呆然自失してつぶやく。「どうしてこんなところへ……暴漢に連れ込まれたのだろうか」

警備員にもその理由はわからなかった。彼は正直に首を横に振り、ここまで自分をいざなった、点々とした草の連なりに目をやった。そして思わず息をのむ。「閣下……あれを……」「なんだどうした」「……花が咲いています」

こんな時に何を言ってるんだ、ドゥルはそう思いつつ、警備員が指さす方を振り返った。そして――

背の低い草のなかから細い茎が立ち上がり、その先端に小さなつぼみが乗り、開いているものもある。橙色の花弁は朝日に透けるほど薄い。もともと草花にうといドゥル

だったがこんな美しい花は見たこともないと瞬時に感じた。太陽の光を受けて、花は男の死体の周囲にも咲きだし、男を覆い隠さんばかりだった。

「これは——彼の血だ」ドゥルはつぶやいた。

「この植物は彼の血から生まれたのだ。黄金門の血には特別な生命力があると聞いたが——こういうことだったか！ シパド、妹よ、よく見るがよい。おまえの夫になろうとした男はこういう人間だった。彼は本物の黄金門の血の持ち主だったのだ」

ドゥルが悲痛な想いを口にする間にも、小さく橙色に輝く花はボムソワールの焼け跡に広がっていく。

シパドの目にはしかし夫となるはずだった男の死に顔しか映っていない。緑色の目もはや開かれず、その口は……一度くらいは彼女の名を呼んだだろうか。

警備員とドゥルとは、大通りのあたりで暴漢にからまれて傷を負ったバイスロイは出血しながらここまで来て力尽きたのではないかと、そんなことを話し合っている。その証が荒れ地に点々と咲いた橙色の花だというのだが、彼女の頭を素通りしていった。そんなことより。

（ここは彼を最初に見かけた場所ではないか。ズタズタにされながらここまで来た？）

ここには彼を引きつけるなにかがあったとしか、考えられぬではないか。それがシパドの結論だった。シパドの嫉妬心はとどまるどころを知らなかった。そして、彼を殺したのは誰か！？ 許さん！！ 誰も彼も、赦さん！！ もちろん恩赦など、あり得ん！！

シパドの目は燃えた。烈火のごとく燃え上がった。未だかつて、これほどの怒りを覚

えたことは一度もなかったのだ。

549.

誰がバイスロイを手にかけたのか。旧メッサナ市民か、それともアンベレオの何者かか。あるいは、彼を哀れんだ父なる金星か。

それは誰にもわからない。

確かなことは、彼が傷ついた体を引きずってたどり着いたのがボムソワール邸だった。それだけである。

第三十七章 『翳る金星』

第三十八章へ続く

### 第三十七章のあとがき

バイスロイさんという人は改題前の「火の精霊」には登場してなくて、そもそも黄金門市というのも改題してから加わりました。

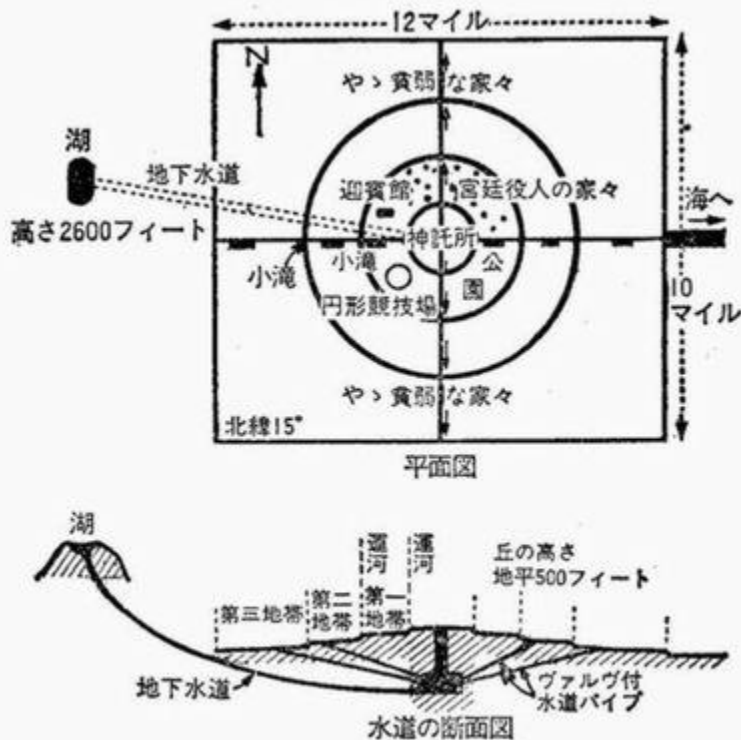
この図を見ると、アレ…プラトンが描写したアトランティスが思い出されてならないのですが…

黄金門市は北緯15度あたりの東海岸にあって森林の多い、公園のような国に囲まれ、富裕階級の邸宅が散在していた。

同心円は運河。運河の水は海水じゃないかな、飲料水は『約790メートルの高さにある西寄りの湖に源を発し、縦・横 約15m x 9mの卵型断面の導水管によって地下をくぐり、宮殿の地下深くにある心臓型の貯水池に導かれた』水をつかっていた模様。

この図からすると面積は約120平方マイル/304平方キロメートル。現在のモルディブとほぼ同じ面積に200万人が住んでいた、といえます。

そしてこの都市を造ったのが、金星存在なのだそうです。ここでやっとバイスロイさんにつながった。最初に出てきた時は野心家の、どっちかという悪役かと思えたんですが、メッサナの薫陶を受けていてメルノとも親しかったんだ。シパドから逃げて、そのまま逃げ切るかと思いきや、事態は思わぬ方向へ…。ほんとにほんとに、思いがけない活躍をしてくれました。minemura賞を贈りたい。バイスロイ様。感謝と合掌と。



図表42 黄金門市  
注：平面図、断面図ともに概略である。

黄金門市の平面図・断面図 (神智学大要より)



## これまでのあらすじ

### 第一部

はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可と依頼によるものだった。

ネウトラ評議会・学術調査団の団長ダーヴェとヒューダーとがホシナ族のもとへやって来た。絶滅危惧種・巨人族の調査のためである。しかし巨人族の姿は見えず、ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤが行方不明になる。ダーヴェの痕跡を追って島を離れた団員ヒューダーとヤスウは移動中に緊急事態信号を捉えた。ヒューダーは信号発信元のエウメロス王国へ、ヤスウはダーヴェを追ってケストル王国へ向かう。

エウメロス王国は巨人族の大群に襲撃されていた。ヒューダーの説得で国王は城を棄てて避難、ケストル王国へ赴いたまま帰国できずにいる王女ヘルガを迎えに、近衛隊長レルはヒューダーと共にケストル王国へ。

エウメロスとの国境付近にはケストルが密かに造った離宮と闘技場があった。そこにはヘルガ王女もマミヤも捕らえられていた。ヒューダーたちは評議会の人間として離宮に入り込むが、ひとりの少年を密入国させたとして捕らえられてしまう。

成り行きからヒューダーは少年にイリチャという名を与え、闘技場で戦うことになる。

### 第二部

エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチャを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。行き場を失い、郊外の湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。

同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を離れてメッサナを目指していた。

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々を恐怖に陥れようと画策していたのだった。

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理パルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

### 第三部

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住民の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。

ある日、アマセオの妻に三つ子が生まれたという知らせが届いた。自身も三つ子であるアマセオは困惑する。三つ子は王位継承の証しであり、その存在は間違いなく混乱をもたらすからだ。

妻子に逢うため帰郷したアマセオは、妻の兄タマシギと語りあううち、タマシギが秘める野望を知る。機織りのシトリ族の立場を盤石なものにしたいがために、タマシギは禁忌に手を染めていたのだ。アマセオが己の前に立ちほだかろうとしているのを感じたタマシギは政庁のフツヌシに訴え出る。フツヌシは王の兵士であるアマセオがホシナ族に接近していることをかねてより懸念していた。そんな折、三つ子が怪鳥にさらわれるという事件が。怪鳥の正体はアマセオの弟だった。生後すぐに間引きされた弟カガセオは、手をかけたタマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のために手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

黒曜石事業の権利を拡大解釈したとの理由で、フツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。そこには王位継承が絡んだ陰謀が大きな影を落としていた。現王と深い関係にあるホシナ族、ホシナ族に近づくアマセオは陰謀と戦いに巻き込まれたのだった。

ホシナとアマセオは旧知のヤサカオの助力を得、フツヌシ軍を迎え撃つ。

### 第四部

母国エウメロスへ帰還した王女ヘルガを待っていたのは、黄金門市の皇帝。彼らもまた巨人族襲撃によって故郷を失っていたが、その際エウメロスの国土へ直行したのは、そこには太古の地下都市・『トゥランの七つの洞窟』への入り口があったからだった。

巨人族の跳梁に、地上での生活を諦めねばならなくなったエウメロスと黄金門の人々は地上への出入り口を閉じ、地下都市へ向けて地下道掘削に取りかかる。

同じころ、ネウトラ評議会は巨人族を殲滅させるべく原子爆弾の製造に乗り出そうとしてメッサナの化学者団と決裂する。爆弾製造の協力者として名乗り出た評議会西支部のコパーン博士は、製造工程の最後に使う素材、ブルー・マーキュリーを無人偵察機に搭載して送り出すが、偵察機はケストル王国北方の氷河地帯で制御不能に陥る。

ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっている皇帝の息子バイスロイ救出に向かう。

世界の果ての島からホシナ族に同行してきたスクナは旧知のヘルガと合流し、ケストル王国へ向かい、氷河決壊に巻き込まれる。

### 第五部

太古の偉大な種族は世界中を結ぶ転送システムなるものを構築していた。そのステーションのひとつがケストル闘技場の地下にあり、ヘルガたちをいずこかへ転送する。彼らが到着したのは冥界最下層ミクトランであり、迎えたのは行方不明になっていたネウトラ評議会のダーヴェェだった。

ダーヴェェは仲間のヒューダー、イリチャと共に巨人族を探索してミクトランへとたどり着いていたが、あまりに広大複雑な異次元空間での探索は遅々として進んでいなかった。しかしヘルガ、スク

ナ、バイスロイが合流したことによってメッサナで起こった音楽生迫害事件について情報交換が行われる。迫害されたメルノとバイスロイとは深い繋がりがあったのだ。メルノが今はミツハと名乗り、その外見がイリチャに酷似していると知ったヒューダーは困惑する。かつて水精霊から生まれた子が名を取り上げられ無力な水棲生物に姿を変えられたという。『ミツハ』とは水精霊を意味するのだ。世界の果ての島からついてきたイモリに、イリチャ=槍と名づけたヒューダーだったが、彼に戦いを宿命づけてしまったかもしれないことに責任を感じる。スクナとヘルガとはミクトラン脱出を敢行、そして、ミクトランの怪物が大挙して襲い来るさ中、イリチャはミクトランの女王テクトリの手に落ち、巨人族生成の現場を見せられる。

## 第六部

テクトリらの前に突然現れた男は、底知れない力でテクトリとベネトナシュの巨人族増殖計画を簡単に握りつぶしてしまった。イリチャの懇願によってダーヴェたちは地上、メッサナへ送られ、イリチャは連れ去られてしまう。事態のあまりの急転はダーヴェたちに無力感と敗北感とをもたらし、メッサナ住民と苦楽を共にしてきたジャガーはアンベレオ王国の命令で全頭が捕獲されることに。ヒューダーはマミヤと再会し、つかの間の安らぎを得る。

そんな折、放火されたメルノの実家の前でバイスロイはひとりの女に会う。ベレオーサ・シパド。彼女はアンベレオ本国から乗り込んできた先遣隊長で、バイスロイが彫刻を得意とする芸術家だという話を真に受け、彼にメッサナ奪還記念硬貨を造らせるため、アンベレオ王都へと送る。記念硬貨に刻まれるモデルとは、神の代理人たるイリチャだった。

メッサナ市はベレオーサ市と改名され、新総督となったシパドはバイスロイに求婚するが、断られる。このことに逆上したシパドは意趣返しに次々と恐ろしいことを企み、全市民を恐怖に陥れるのだった。

## 奥付

Salamander in the circle

第三十七章 翳る金星

2024年4月20日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#) blog [D&R](#)

表紙素材 [「月とサカナ」イラストAC](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

---